

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320154

研究課題名(和文) 河南・山西地区の多民族融合社会史の研究 - 石刻史料による中国地域社会史解明の試み

研究課題名(英文) Study of the multiracial fusion social history of Henan and Shanxi districts ; Trial of the local social history elucidation by epitaph historical materials in China

研究代表者

村岡 倫 (Muraoka, Hitoshi)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：30288633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,200,000円、(間接経費) 4,260,000円

研究成果の概要(和文)： 研究期間中に、ニューズレター『13,14世紀東アジア史料通信』の第16号～第22号および別冊の計8冊を刊行し、研究代表者および研究分担者・連携研究者の石刻史料に基づく研究成果を掲載した。本科研費で購入した『西安碑林全集』に関して、奈良大学図書館では「『西安碑林全集』を見る」という企画展を開催し、ニューズレター別冊は、その展示に関連して刊行したものであり、研究成果を一般に還元した。第19号、第20号も『西安碑林全集』研究の成果として刊行したものである。そのほか、特筆すべき研究として、新たに発見された漢文・パズパ文合璧碑文の研究、元代のモンゴル高原における地方行政制度の研究などが挙げられる。

研究成果の概要(英文)： During a study period, we published eight books of the 16th - 22nd of "the 13,14 century East Asia historical materials communication" that was letterzine and the separate volume in total. We placed an article of the result that we studied based on epitaph historical materials in that. We purchased "Xi'an monument forest complete works" for this Grant in Aid for Scientific Research and held a plan exhibition "to watch Xi'an monument forest complete works" in Nara University library. We published the "13,14 century East Asia historical materials communication" separate volume in conjunction with the display. We in this way told general people about the result of the study. We published the 19th, the 20th as result of the "Xi'an monument forest complete works" study. In addition, notable studies include the study of Chinese classical letter, Hphags-pa letter epitaph discovered newly, the study of the local administrative system in Mongolia of cause charges.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：モンゴル帝国 元朝 河南地方 山西地方 石刻史料 多民族融合

1. 研究開始当初の背景

(1) 今回の研究代表者、研究分担者、連携研究者らは、これまで長期にわたって、石刻史料を使用することによって、新しい観点から宋金元時代の中国社会について明らかにすることを共同の研究作業として継続し、その内容を学界に発信してきた。中国史をはじめとする東アジア史・内陸アジア史の各時代、各分野において、石刻史料の利用による研究の進展が、研究動向の類で広く指摘されている現況は、我々の活動からはじまったと自負する。こうした研究の背景にある発想としては、それまでの石刻史料を用いての研究が、清朝時代以来の「石刻書」に掲載された過去の「録文」(石刻を文字化したもの)を利用し、その内容を論ずるという方法であったことから一歩進んで、拓本、あるいはその図版、さらには現地調査による写真などの石刻画像をもちいて、自ら録文を作成する、言い換えれば、人が「読んだ」ものを「読む」のではなく、オリジナルな材料から自らが石刻を「読み」、その内容を検討するという点に1つの特徴がある。そして、こうした研究活動が、新しい石刻研究の流れを、少なくとも金元石刻研究においては生み出した。

(2) 我々は、これまでも、既存史料の読み直し、新史料の紹介など、金元史料研究の最前線で活動してきており、平成12年度・13年度には本研究の連携研究者・松田孝一、平成16年度～18年度には研究分担者・森田憲司、さらに平成20年度～22年度には、今回も研究代表者を務めた村岡倫を代表とした科研費基盤研究(B)においては、既知の石刻についての現地での再確認、読み直しを試みるとともに、文書、典籍などの調査も行なった。その成果は、松田科研、森田科研の研究成果報告書において、あるいは森田科研採択時より、現在に至るまで定期的に発行してきている『13、14世紀東アジア史料通信』にお

いて、そして各人が新史料の紹介や石刻史料を使用した研究・史料目録を掲載することによって、金元時代史研究の新たな方向を生み出す力となった。

このようにして、現地調査や既存文献の調査は進展してきたが、石刻史料の持つ個別具体性という特徴を踏まえれば、地域社会研究への応用が最も成果の期待できる分野であると考え、我々は、これまでも、河南・山西地区の現地調査を行ない、地域研究との具体的な結び付けの場として、この地域を対象とする有効性を感じてきた。また、何度かの現地調査によって、これらの地域には、国家祭祀にかかわる史蹟も多く、そちらからのアプローチもあわせて行なうことの必要性を痛感していた。

2. 研究の目的

(1) 3世紀の匈奴以降、13世紀のモンゴルに至るまで、数多くの北方遊牧民が中国本土へ南下した。そのルートの一つが現在の内モンゴル自治区から山西地方を縦断するという経路であった。南下した彼らは、山西地区とその南方の河南地区一帯に定着し、現地の漢人と共存し、多民族融合の社会を築き上げていった。したがって、中国史の重要な課題である現代中国の多民族国家形成の過程解明には、河南・山西地域社会史の諸相の研究がたいへん有効であると言えよう。特に河南地区に関しては、史料的な制約もあって、これまで研究が進んでいなかったが、近年、洛陽を中心として、墓誌などの石刻史料の発見が目覚ましい。それらの新出土史料に基づいた解明を試み、石刻史料による中国地域社会史解明のケーススタディとする。

(2) 研究期間内における中心的な研究課題は、北方遊牧民の南下、河南・山西地区定着後、現地の漢人といかに共存し、これらの地に、多民族融合社会がどのように形成されていったのか、その諸相を、石刻をはじめとす

る史料の「発見」あるいは「再発見」によって解明することにある。

山西に関して言えば、これまでも研究蓄積はそれなりにあり、元朝時代については、今回の申請者各人も研究し、大きな成果をあげてきた。しかし、すでに述べたように、河南地区に関しては、史料的な制約があり、研究が進んでいなかった。近年、洛陽を中心に、墓誌などの新たな石刻史料の発見や紹介が相次いでいる。新出土史料はあらゆる時代に及んでおり、その中には、南下して定着した北方遊牧民、あるいはその子孫の墓誌、その他、彼らの活動を記述する石刻が数多くあり、河南地区の多元性の様相を示すものが少なくない。本研究は、新たに発見・紹介された石刻史料、あるいは、研究期間中の現地調査の成果として知りえた新たな史料によって、金元時代を中心に、それ以前の北方民族の南下、定着、融合の様相をも明かにしていく。課題は多岐にわたるが、これらの問題を着実に研究することによって、中国でもいち早く多民族融合の社会を実現した、河南・山西地区の地域社会のあり方を解明する。

(3) 本研究の大きな特色は、可能な限り現地調査を行ない、石刻史料の出土状況、石刻を伴う遺跡の調査成果などを踏まえた研究を進めることにある。歴史学はともすれば机上で史料を解読するという作業に終始しがちであるが、本研究は、その枠を越えて、現地調査、遺跡との関連づけ、それを踏まえた上での史料の歴史的な位置づけをするという点が独創的である。そのためには、現地研究機関との連携・協力関係が不可欠であるが、申請者たちは、これまでに、今回、研究対象とする河南・山西に関しては、当該地域の各研究機関、研究者たち、さらには中国における歴史研究の中核の1つである中国社会科学院歴史研究所の関係分野の研究者たちと協力関係を構築してきており、本研究でもそれを十分

に生かせる状況にある。

前述の通り、本研究のメンバーの多くは、現地調査、あるいは史料所蔵機関での調査を通じて、新史料の「発見」、あるいは、既知の史料の史料的価値の「再発見」の実績を有する者である。これも本研究の大きな特色である。本研究によって、河南・山西地区がその後の多民族国家・中国の先駆となっていく諸相の解明が大きく進展することは間違いない。

河南・山西に移住した北方民族は、種族・言語などの出身にかかわらず能力に応じて人材を登用し、現地の人々との融合を成功させた。それらの諸相を明らかにすることは、グローバル化の弊害や民族対立を抱える現代にとって、大きな意義を有する。

3. 研究の方法

(1) 代表者および各研究分担者・連携研究者は、新しい視点からの河南・山西地区の地域社会史研究の展開をめざして、それぞれが専門とする言語・時代・分野ごとに史料の収集・整理を継続し、それらの内容の検討・分析を進め、北方遊牧民による河南・山西統治と多民族の融合の諸相解明に努めることとする。代表者および各研究分担者の分担は、下記の通りとする。本研究のテーマである「多民族融合社会」に着目し、研究分担者を、「元朝石刻論」を扱うグループ、「河南山西地域社会の歴史的展望」を考察するグループ、「金元時代の河南山西における多民族社会」を研究するグループに分ける。ただし、これはあくまでも研究調整のためのもので、研究の実行にあたって必要な連絡調整をグループで行なうが、研究集会などは全体として行なう。

(2) 以上の内容の研究を進行させるにあたり、各自、文献史料の収集・整理・研究を行なうが、定期的に、文献史料に関する研究集会を開催し、共同で読解を行なうとともに、史料情報を共有することにする。研究集会を

定期的に開催し、その際には石刻史料あるいは関連する分野の研究者を幅広く招聘し、専門的知識の提供を受ける機会を設ける。また、国内で、当該分野の史料を所蔵する機関へは、随時、分担者・連携研究者を派遣してその収集を行なう。前述のように、石刻については現地調査が不可欠であるので、各人は、研究対象である河南・山西地区を中心に、その他の地域で現地調査を行なう。

(3) 今回の共同研究における成果は、個別論文による発表のほか、各研究者の従来からの蓄積などもふくめて、初年度から可能な範囲で公刊を開始し、学界に還元する。これまで受けた科研においては、前述のように、ニューズレター『13, 14 世紀東アジア史料通信』を刊行し、幸いにも好評を得てきたので、今回の共同研究でも、ニューズレターを引き続き発行する。以上に述べてきた国内外の調査によって蓄積された史料情報を、参加研究者の間で共有化することによって、共同研究はその実をあげうると考える。

4. 研究成果

(1) 初年度は、11月になってからの追加採択であったため、大規模な調査はできなかったが、台湾や中国山西省・河南省で調査を行ない、情報収集や現地研究者との交流を行なった。研究集会は定期的で開催し、12月の集会では、アメリカ・ペンシルヴァニア大学の王錦萍氏を招聘し、講演してもらった。2年目からは研究計画に基づき、各人が海外調査を行なった。主な調査地は本研究課題にも挙げている河南省であり、特に日本僧・円仁の名が記される碑で有名になった法王寺でこれまで知られていなかったモンゴル＝元朝時代の碑を3点発見した。それらの碑については、研究集会で解読を進めた。また、他の調査地としては、北京において元朝時代の都である大都および明清北京城の都城跡の調

査と文献収集、内モンゴル東部・遼寧省においても元代の遺跡や碑文の調査を行なった。また、アメリカ合衆国カンザス・シティのネルソン・アトキンス美術館においては、北朝時代からモンゴル時代に至る山西を中心とする仏教資料及び仏教造像碑を初めとする石刻史料、当該時代の陶磁器・副葬品など各種物質資料の調査を行ない、大きな成果があった。

(2) 研究期間中に、『13, 14 世紀東アジア史料通信』の第16号～第22号および別冊の計8冊を刊行し、研究代表者および研究分担者・連携研究者の石刻史料に基づく研究成果を掲載した。本科研費で購入した『西安碑林全集』に関して、奈良大学図書館では「『西安碑林全集』を見る」という企画展を開催し、『13, 14 世紀東アジア史料通信』別冊は、その展示に関連して刊行したものであり、研究成果を一般に還元した。第19号、第20号も『西安碑林全集』研究の成果として刊行したものである。

(3) そのほかの調査について記しておく。本科研の研究目的である河南省や山西省の有する地域的特性を際立たせるために、今回は、近年、仏教関係遺蹟や文物の新発見が相継いでいる中国河北省・山東省で特に博物館所蔵の南北朝時代の造像銘及び墓誌に絞って、その銘記を調査し、移録作業を実施した。『13, 14 世紀東アジア史料通信』第17号で研究分担者の松川が取り上げた漢文・パспа文字モンゴル語合璧碑文の調査に、中国社会科学院の研究者の協力のもと赴いた。台湾で故宮博物院や中央研究院歴史語言研究所など各研究機関所蔵の元代碑文等の史料の調査を行なった。また、連携研究者の松田は、モンゴル国アルハンガイ県のタイハル大岩で、トルイ家へ出仕したトルイ家の華北領真定の漢人長官史天沢の長男の墨書を発見し、

その成果を本科研の報告書として発刊している『13, 14 世紀東アジア史料通信』第 21 号に掲載した。また、村岡は、モンゴル国エルデニゾー寺院所蔵の碑文から、モンゴル帝国時代のモンゴル高原でも、14 世紀になると、元朝治下の中国の地方行政制度を取り入れるようになっていたことを報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 17 件)

松田孝一、モンゴル国発見の史格の墨書について、13,14 世紀東アジア史料通信、査読有、第 21 号、2013、1 - 8

森田憲司、可見元代石刻拓影目録稿・五統(從至治至至順)、奈良大学総合研究所報、査読有、第 21 巻、2013、1-18

桂華淳祥、金代における宗室と佛教、大谷学報、査読無、第 92 巻第 2 号、2013、24 - 45

宮澤知之、元朝の商税と財政的物流、唐宋変革研究通訊、査読無、第 4 号、2013、9 - 23

松川節、国清寺パスパ字モンゴル文聖旨碑、13,14 世紀東アジア史料通信、査読有、第 17 号、2012、1 - 10

渡邊久、高継嵩碑考釈、13,14 世紀東アジア史料通信、査読有、第 18 号、2012、1 - 14

井黒忍、至元年間における関中の復興と地域開発 ヒトとモノの動きを中心に、13,14 世紀東アジア史料通信、査読有、第 19 号、2012、1 - 37

松田孝一、モンゴル帝国時代の漢地の探馬赤とその草地について、13,14 世紀東アジア史料通信、査読有、第 19 号、2012、38 - 47

渡辺健哉、金の中都から元の大都へ、中国 社会と文化、査読有、第 27 号、2012、8 - 28

森田憲司、北京国子監所在の元科学碑をめぐる札記、奈良史学、査読無、第 27 号、2012、152 - 160

井黒忍、水利碑研究序説、早稲田大学高等研究所紀要、査読無、第 4 号、2012、77 - 84

宮澤知之、元朝の財政と鈔、(佛教大学)歴史学部論集、査読無、第 2 号、2012、43 - 64

佐藤智水、中国初期仏教における儒教・道教との論争と交感、問答と論争の仏教、査読無、2011、111 - 129

佐藤智水、中国における造像供養の背景について 北朝造像銘を手がかりに、ガンダーラ美術の資料集成とその総合的研

究、査読無、2011、75 - 84

井黒忍、山西翼城喬沢廟金元水利碑考以《大朝断定使水日時記》為中心、山西大学学報、査読有、第 3 号、2011、92 - 97

渡辺健哉、元の大都における仏寺・道觀の建設 大都形成史の視点から、集刊東洋学、査読有、第 105 号、2011、64 - 81

船田善之、モンゴル帝国(大元)史研究における漢語文書史料について、歴史と地理 世界史の研究、査読無、第 649 号、2011、54 - 58

[学会発表](計 14 件)

佐藤智水、山東の地域社会と女性主導の造像銘事業、龍谷大学アジア仏教文化研究センター主催国際ワークショップ『仏教石刻と地域社会』、2014.1.26、龍谷大学

FUNADA, Yoshiyuki, Mongol Rulers and Northern Chinese under the Early Mongol Empire: A Study on Chagatai's Domain in Taiyuan, 2013ACES Annual Conference, 2013.4.7, Indiana University, Bloomington, IN, USA

渡辺健哉、常盤大定関連資料について、文化財保護国際会議「龍門石窟と開野貞」、2013.8.27、法政大学

渡辺健哉、元・明代における北京～通州間の交通路、第 46 回東洋史学研究会、2013.11.16、福岡大学

宮澤知之、宋元明をつらぬく経済史の流れ、第 39 回宋代史研究会、2013.8.28、伊東山喜旅館

井黒忍、中国汾河流域における分水の知恵 希少な資源をいかに分けるのか、公開シンポジウム「ユーラシア乾燥地域における河水利用～水が育む歴史・文化・環境～」、2012.7.21、東北学院大学

宮澤知之、元代財政性物流之特徴、唐宋変革課題国際學術討会、2012.12.24、台湾国立政治大学

MATSUDA, Koichi, Tibet and Tibetan Buddhism under Mongol Rule, Roundtable series on the nature of Asian relations from the 12th to the early 20th century (招待講演)、2012.5.10, Asia Institute, UCLA

船田善之、チャガン・ノヤンの言語二通について モンゴル時代早期のモンゴル語直訳体碑文、第 44 回中央アジア学フォーラム、2012.3.31、大阪大学

井黒忍、流域的開与結合 以黒河流域平天仙姑信仰為切入点、流域歴史与政治地理學術研討会、2011.9.26、中山大学(中華人民共和國)

渡辺健哉、金の中都から元の大都へ、中国 社会文化学会 2011 年度大会、2011.7.10

渡辺健哉、東北大学附属図書館蔵 常盤大定旧蔵拓本について、第4回中国石刻合同研究会、2011.7.30、明治大学

舩田善之、石刻フィールドワークの手法と実践 モンゴル時代早期のモンゴル語直訳体碑文、国際ワークショップ「近世華北における社会的紐帯としての宗族と宗教 2001~2011年における石刻史料調査の成果と新展開」、2011.12.21、早稲田大学

井黒忍、碑のレーゾンデートル社会をつなぐ水と信仰、同上国際ワークショップ

〔図書〕(計5件)

渡辺健哉(共著) 白帝社、近世東アジア比較都城史の諸相、2014、316

井黒忍、早稲田大学出版部、分水と支配 金・モンゴル時代の華北の水利と農業、2013、464

松田孝一・オチル、大阪国際大学、モンゴル国現存モンゴル帝国・元朝碑文の研究、2013、287

森田憲司、奈良大学図書館、「西安碑林全集」を見る、2012、9

舩田善之(共著) 明石書店、モンゴル史研究 現状と展望、2011、397

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村岡 倫 (MURAOKA, Hitoshi)
龍谷大学文学部教授
研究者番号：30288633

(2) 研究分担者

森田 憲司 (MORITA, Kenji)

奈良大学文学部教授

研究者番号：20131609

(3) 研究分担者

佐藤 智水 (SATO, Chisui)
龍谷大学文学部教授
研究者番号：40116463

(4) 研究分担者

桂華 淳祥 (KEIKA, Atsuyoshi)
大谷大学文学部教授
研究者番号：40148359

(5) 研究分担者

渡邊 久 (WATANABE, Hisashi)
龍谷大学文学部准教授
研究者番号：70319507

(6) 研究分担者

舩田 善之 (FUNADA, Yoshiyuki)
九州大学人文科学研究科(研究院)講師
研究者番号：50404041

(7) 研究分担者

渡辺 健哉 (WATANABE, Kenya)
東北大学文学研究科専門研究員
研究者番号：60419984

(8) 研究分担者

井黒 忍 (IGURO, Shinobu)
早稲田大学高等研究所招聘研究員
研究者番号：20387971

(9) 研究分担者

櫻井 智美 (SAKURAI, Satomi)
明治大学文学部准教授
研究者番号：40386412

(10) 研究分担者

松川 節 (Matsukawa, Takashi)
大谷大学文学部教授
研究者番号：60321064

(11) 連携研究者

宮澤 知之 (Miyazawa, Tomoyuki)
佛教大学歴史学部教授
研究者番号：70166164

(12) 連携研究者

松田 孝一 (MATSUDA, Koichi)
大阪国際大学名誉教授
研究者番号：70142304